

## 株式会社谷牧場 代表取締役

## 谷 学さん

## 明日へ向かって駆ける

## 農業法人の経営者は語る

「家族の理解と協力があり、今まで続けられた。このことに感謝しつつ5年後、10年後を見通して経営を行いたい」と話すのは、南丹市八木町の(株)谷牧場代表取締役の谷 学さん（42）。

同町で酪農業を営む谷さんは、2003年に就農して16年目を迎える。祖父の代から酪農を営んでいたが、父親が難病になり事業継承を考えた時、従業員を雇い法人化を決めた。16年12月に法人を立ち上げる際に代表取締役となり、家族、従業員と共に経営するが、経営は厳しかった。5年前、JAの担当者に相談し絶対に自家育成は必要と考え、自家育成牛を増やしたことで、初妊牛相場に左右されずに頭数を確保できるようになり、売上も伸び昨年から経営が安定してきた。

しかし、酪農業を続けていくには、おいや鳴き声など細心の注意が必要

## 地域に根付いた酪農

で、地域の理解が大切だ。小学生が牧場体験をする受け入れ先になるなど地域に根付いた活動を続けている。酪農教育ファームの認証を受けており、地元中学生の職場体験の受け入れや、近畿生乳販連からの依頼で出前授業を行ったり、府内で行われるイベントにも積極的に参加する。

谷さんは「3K（きつい、汚い、休日が取れない）」と言われる職場を、家

族、環境、貢献の新しい3Kに変えた。家族の時間が取れるようにし、環境問題にも配慮し、この地域にこの牧場があって良かったと思われる地域貢献を行いたい。人がいつ来ても見ても見える牧場、酪農を心掛けている。農業のイメージを変えていきたい」と話す。

他にも酪農業には課題がある。「府内では、酪農は離農が進み、生乳の生



▶新たに導入した飼料用トラクターと谷さん

産量が落ちている。空き牛舎が多いが、なかなか貸してもらえないのが現状だ。そこで地元JAに間に入ってもらい、リタイヤする前に後継者をつくるなどの第三者継承をして酪農が続けられるようにしたい。何十年と頑張ってきた素晴らしい財産を有効に使わせてもらいたい」と谷さんは課題解決策を話す。

「谷牧場では牛舎のキャパシティがいっぱいになったので、今後は増棟を考えている。ロボット搾乳機を導入するなど、ITの導入も図っていききたい。情報通信技術（ICT）やスマート農業を使うことで、離れたところにいくつか牧場を持てるかもしれない。その他にも、米や発酵粗飼料（WCS）やホイルクロップサイレージや露地野菜を栽培することで経営の幅が出てくる。農業は本当にやりがいのある仕事だ」と谷さんはあふれる夢と希望を熱く語る。

■法人所在地 南丹市八木町池上小堤16番地。（電）0771（20）2759。

■法人概要 2016年12月設立。役員4人、従業員2人。経営面積 牛舎2148平方メートル（経産牛110頭、育成牛70頭）、水稲55㍓、WCS 60㍓。農業機械 トラクター・3トンダンプ・小型ホイールローダー・リフト各種台、飼料用トラクター・軽トラ各1台。